

我が国における潮湯治から海水浴に至る歴史的変遷

— 大野海水浴場（潮湯治場）を例として —

○國木 孝治（広島大学大学院教育学研究科）

東川 安雄（広島大学教育学部） 石井丈也（尾張大野史研究会）

キーワード： 大野町、潮湯治、海水浴、鴨長明、徳川秀忠、尾張名所図会、後藤新平

1. 緒言

我が国における海洋性レジャー・レクリエーション活動の中で、最も多くの人々が参加している活動は海水浴であり、現代の夏のレジャーとして広く国民に受容されている。その歴史を紐解くと、江戸後期から明治初期にかけて伝播・導入されたことが諸説より導き出されるが、海水浴という概念を如実に反映させたような行為や場が、突如として出現したとは考えにくい。例えば、海中への浴み行為は先史の中に探し求めることができるであろうし、各地に偏在していた潮湯治のような類似的行動様式を踏まえたうえで捉える場合や、西洋の医学的認識を介して伝播された医療として、海水浴場の公設時期として、行楽やレジャーとして捉える場合等、その起源は単一的なものではなく、種々の言説の中に散布されている。したがって、先史の行動様式との関連性をはじめ、海水浴が我が国に導入された時期の様相や、レジャー化に至る推移、それらに伴った浴み・泳ぎといった行為それ自体の意味の変容等の究明が不可欠である。

我が国における海水浴および海水浴場史に関する先行研究について、いずれの研究も特定の地域を通史的に取り扱ったものではなく、複数地域の事象を列記し、整理・考察したものである。また、先史から海水浴に至る変化・変容の様相、レジャー化・行楽化の時期等の解明には至っていない。そこで本研究では、愛知県常滑市大野町にある大野海水浴場を事例として取り上げ、いままで単体として数点の史実しか取り上げられることのなかった、大野における潮湯治および海水浴文化の全体像を把握し、発祥から伝播、変化・変容するプロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

現在愛知県下における海水浴場数は21・26ヶ所と報告されているが、このうち県内初の海水浴場開設地が、本稿で取り上げる大野である。この地は、海水浴場開設以前から潮湯治とよばれる行動様式が古くから存在し、我が国における海水浴黎明期において、比較的早い時期に海水浴場が開設された。大野海水浴場を本研究の対象地とすることで、海水浴伝搬以前に行われていた行動様式が、どのような過程を経て成立するのか、あるいは海水浴という新しい行動様式へと組み込まれるのか、または、新たな機能をもって成立するのか、という変化・変容のプロセスがみえてくる。

そこで本研究においては、収集した資料を「潮湯治の発祥・発展期」と「海水浴の発祥・発展期」とに区分、整理し、各資料内容の信ぴょう性を論考に加えたうえで、個々の行為・行動が、いつ、誰（誰ら）によって行われ、どのような内容で、どのような目的、方法をもって受容されていたのか、といった具体的事象を明らかにすることを課題とする。

3. 潮湯治の発祥・発展期

1) 12-13世紀にみられる潮湯治

この期には、大野における潮湯治に関係する吟詠・歌が数点残されており、以下に主なものを抜粋する。

「浴みにとあらひ流せし知多の浦に^{わたり}藤かさぬる袖のすゝしさ」（文信）

文信とは西暦 900 年後期から 1000 年初期の平安時代に生存した鎮守府将軍・尾張之守であった藤原文信と考えられる。さらに、平安時代から鎌倉時代にかけての歌人である鴨長明（1155-1216）が、次の歌を詠じている。

「生魚の御あへもきよし酒もよし大野の湯あみ日數かさねむ」（長明）

上記 2 歌から本研究の目的に即する解答を導き出すにあたり、平安・鎌倉期の大野では「湯あみ」と呼ばれる行為が個々人によって行われていたということが言える。

2) 16-17世紀の徳川秀忠の書状

大野町平野家に、徳川二代将軍秀忠が、弟である福松丸（尾張国清洲藩主・松平忠吉の幼名）に送ったと考えられている書状が残されている（図・1）。

本研究に即する導き出せる考察として、16-17 世紀ににおいて腫物治療のために大野に潮湯治に来て成果があったという史実は重要な資料である。17 世紀頃には既に、大野の潮湯治による治癒効果が認められており、社会のある一定の階層に属する者によって支持されていたと考えられる。

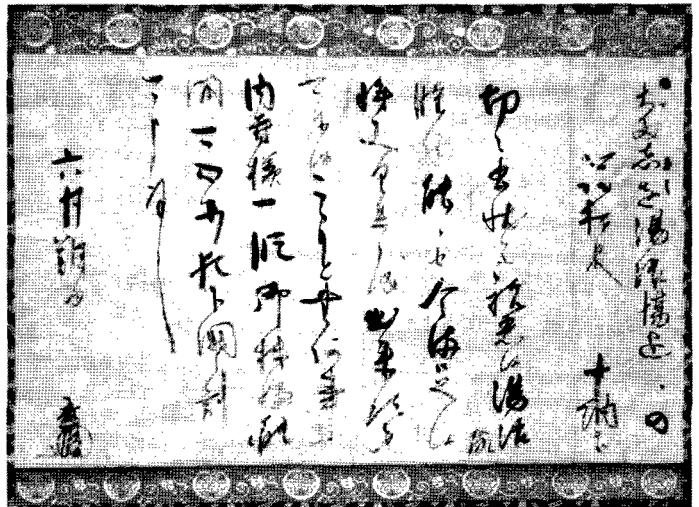


図1 秀忠書状（大野町 平野家所蔵）

3) 19世紀の潮湯治

この期の大野における潮湯治について大野の潮湯治を最も知らしめたのは、1844（天保 15）年に刊行された『尾張名所図会』であると思われる。この巻之六の「塩湯治」と題した項において、大野の様相を絵図（図・2）と解説によって紹介している。

この絵図には、1830 年代またはこれ以前期における大野の潮

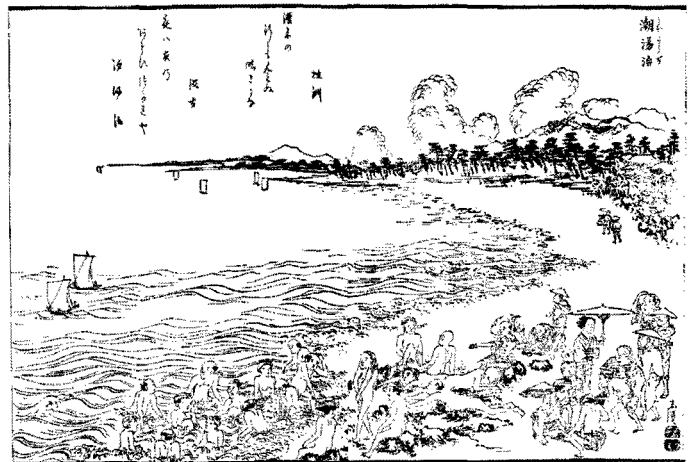


図2 『尾張名所図会』にみられる大野の潮湯治 1844(天保15)年

湯治の歴史を考察するうえで有用な情報が現れている。注目されることは、1日に何度も入水していること。第2に、5・7日間続けていればあらゆる諸病を治すという潮湯治の期間と効能。第3に、各旅亭に2・300人という人数が宿泊していたということは、当時の旅宿の規模を想像するに、夏季期間における大野の繁盛がうかがい知れる。また、旅宿に海水を汲んで湧かし海水温浴として利用していた客層は、中人と呼ばれる階層以上によって受容されていたこと。潮湯治を行う場所は現大野海水浴場（後述の「瑠璃が浜」）だけでなく、広範囲な場において行われていたことなどが挙げられる。さらに注目されることとして、磯の付近の岩石の上に腹ばいになって寝そべる行為や、全裸の姿がみられることである。

4. 海水浴の発祥・発展期 ～1881-2年の海水浴場の開設

以下は、後藤新平（1857-1929）が1882（明治15）年に著した『海水効用論附海浜療法』の「緒言」にみられる内容である。

「今茲辛巳（明治14年）ノ夏余公命ヲ奉シ愛知県知多郡大野村海水浴場ノ検査ニ赴キ…」（カッコ内筆者）

これを踏まえたうえ、諸資料をもとに大野海水浴場の開設に至る経緯として、次のことが導き出せる。

大野海水浴場の開設は、1881（明治14）年夏に当時愛知県医学校（現名古屋大学医学部）の学校長兼病院長であった後藤新平がこの地の潮湯治の注目し、海水の試験を実施したことに始まる。なお、これに端を発し、当時の海音寺住職ほか有志の私費によって、海岸に隣接する海音寺境内に加温浴場「大野千鳥温泉」が設置された。さらに後藤は翌1882（明治15）年、内務省衛生局の官僚として当省衛生局長であった長与専齋を随行して再来し、浴場および施設の調査を行った結果、「海内好箇ノ海水浴場」として発表された。次いで、当時の愛知県令（現在の県知事にあたる）であった國貞廉平（在任1880-1885）はこれを耳にし、更なる海水浴場の奨励のためムルデルに緻密調査を依頼し、称賛の評価を得たことで、大野海水浴場は広く認知されるに至る。

よって大野海水浴場の開設は、後藤が勤務地であった愛知県下でこの潮湯治の存在を知り注目したこと、後に長与、国定ほか地元関係者の働きにより、1882（明治15）年に開

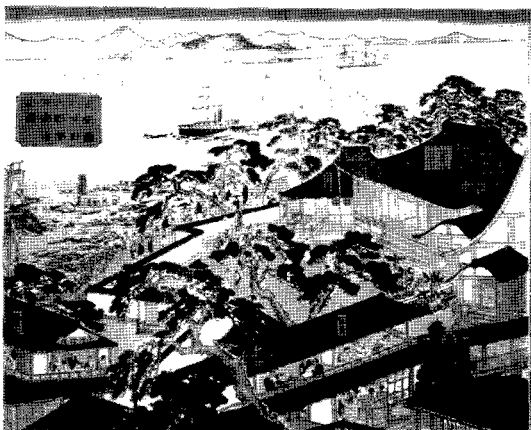


図3 『尾張國知多郡大野港潮湯治之圖』
1882(明治15)年（大野町 加藤勝彦氏蔵）

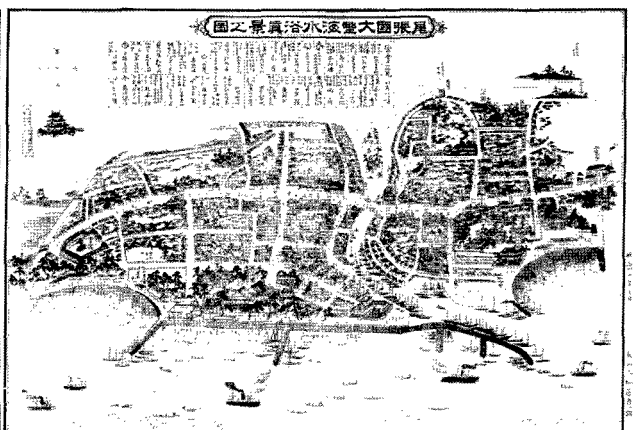


図4 『尾張國大野海水浴場眞景之圖』1907(明治40)年版
(大野町 尾張大野史研究会蔵)

設されたと考えるのが妥当であろう。

なお、海水浴場として指定された場所は、現大野海水浴場を含む3ヶ所で受容されていた潮湯治場であった（図・3 および図・4 参照）。

5. 結語

本研究の目的は、より地域的な、あるいは個々の海水浴場に即した究明が必要とされている課題を残している海水浴史研究において、海水浴場開設以前から潮湯治とよばれる行動様式が古くから存在し、我が国における海水浴黎明期において比較的早い時期に海水浴場が開設された大野海水浴場を事例として取り上げることで、いままで単体として数点の史実しか取り上げられることのなかった大野における潮湯治および海水浴文化の全体像を把握し、発祥から伝播、変化・変容するプロセスを明らかにすることを目的とすることで、海水浴伝搬以前に行われていた行動様式が、どのような過程を経て成立するのか、あるいは海水浴という新しい行動様式へと組み込まれるのか、または、新たな機能をもって成立するのか、という変化・変容のプロセスを明らかにすることであった。

本論考を基に、大野における潮湯治の発祥から伝播、変化・変容の概要を次のようにまとめることができる。

12・13世紀（平安・鎌倉期）における行動様式について、現存するこの時代の資料数が限られていたという点は課題として挙げられるが、①潮湯治の名称はみられなかったこと、②個々人によって行われていた行為・行動であったこと、③海中に浸かる行為であったのか、海水を沸かし浴した行為であったのかを決定づけるものではなかった。したがってこの当時の行動様式は、「湯浴み」と呼ばれる個々人によって行われていた行為・行動であって、潮湯治がこの地の文化として成立する以前、もしくは成立し始める頃の、任意的な行動様式であると言える。

14世紀になると、潮湯治の名称が現れ、諸病の治療という明らかな目的をもった行為として受容され始める。16・7世紀には、病気治療に効があることが広く（少なくとも尾張藩内には）伝播されるに至っている。これらから、14・17世紀頃の潮湯治は、諸病の治療を目的とした、特定される個々人によって支持され受容される文化的機能を有していた。

18世紀になると、一定の階層や特定される個々人のみでなく、より広い階層によって受容されはじめている。また、薬湯としての効能を有することが伝播され、海水を自宅に持ち帰り湧かして浴す等の行為・行動がみられることから、より能率的な行動様式が発明され受容される時代として位置付けられ、この地の普遍的な文化として成立したと考えられた。

19世紀になると、潮湯治に適する時期や頻度等、浴法が明確化しながらも、各々が自由気ままに受容可能な社会的背景が成立し始めている。なお、明治14・15年の海水浴伝播期において、大野海水浴場開設に携わった内務省衛生局長・長与専斎、および後藤新平による働きかけは、重要な役割を果たしたと言えることができるが、海水浴という概念が大野の地で受容され成立するのは、概ね明治20・30年代と考えられた。

レジャーとしての構造は、江戸後期の潮湯治にみられたことから、海水浴文化伝播以前から既にレジャー化へと変容する要素を内包していたと結語する。

日本レジャー・レクリエーション学会 第40回学会大会
ポスター発表

■会場 18号館2階特設会場

ポスター会場オープン時間 10:30~16:00
質疑応答(発表者配置時間) 13:30~14:30

- P-1 温泉地の旅行決定要因に関する研究
○西田 集[東京農業大学]
△上岡 洋晴[東京農業大学]
- P-2 保育所での運動あそびの取組みに対する保育士と保護者の評価
○渡邊 真也[一般財団法人身体教育医学研究所]
岡田 真平[一般財団法人身体教育医学研究所]
朴 相俊[一般財団法人身体教育医学研究所]
伊藤 勇太[一般財団法人身体教育医学研究所]
上岡 洋晴[東京農業大学地域環境科学部身体教育学研究室]
塩崎 和男[東御市健康福祉部]
岩田 広子[東御市健康福祉部]
岩下 由美[東御市健康福祉部]
- P-3 これまでの医療・福祉領域における「レクリエーション援助」の解釈に関する一考察
～介護福祉士教育・福祉レクリエーションワーカー養成の流れの中で～
○小池 和幸[仙台大学]
高崎 義輝[仙台大学]
- P-4 A Case Study on the Activations of Marine Sports in Local Government and University in Korea
○Choi, Bong-Gil·Yoon, Hyoung-Ki [Soongsil Univ.]
△Morooka Fumio [Sophia Univ.]
- P-5 The Study on the Policy of Leisure & Recreation and Its Condition with Regional Linkages
○Jin, Hyun-Joo·Chon, Tae-Jun [Soongsil Univ.]
△Morooka Fumio [Sophia Univ.]
- P-6 An Analysis of Research Trend on the Regional Linkages and Leisure & Recreation in Korea
○Yeon, Boon-Hong·Oh, Sei-Yi [Soongsil Univ.]
△Morooka Fumio [Sophia Univ.]
- P-7 中国・瀋陽市のまちづくりにおけるランドスケープ遺産の保全と活用
○鄧 軻[東京農業大学大学院]
△服部 勉[東京農業大学]
△栗野 隆[東京農業大学]
△鈴木 誠[東京農業大学]
- P-8 興望館学童クラブにおける集団遊びの実践
～日常活動とキャンププログラムについて～
○後藤 敬一[社会福祉法人興望館]
△高橋 伸[国際基督教大学]
- P-9 渋谷区裏原宿を事例としたファッションショップの形成過程とその特徴
○服部 勉[東京農業大学]
川合 進矢[JAとびあ浜松]
- P-10 山梨・清里における観光地化とその変容過程
○服部 勉[東京農業大学]
浅川 望美[(有)浅川造園]
- P-11 子育て中の母親のQOLの向上
～「市エアロビックスサークル参加者の調査」～
○松永 須美子[南九州短期大学]
松永 智[宮崎大学]
- P-12 地域の伝統的レクリエーション「神楽」の継承実態に関する基礎研究
迫 俊道[大阪商業大学]
- P-13 効果的なレクリエーション指導に関する研究(1)
～効果を意識した歌体操と効果を意識しない歌体操の筋活動の違い～
○高崎 義輝[仙台大学]
小池 和幸[仙台大学]
- P-14 占領下における全国レクリエーション大会(1947～1951)に関する研究
○加藤 幸真[日本大学大学院]
内藤 真人[日本大学大学院]
澤村 博[日本大学]
- P-15 厚生省設立までの史的的研究
○溝口 理紗[日本大学]
△澤村 博[日本大学]
- P-16 戦時下の厚生運動に関する研究
～昭和18年から終戦まで～
○中濱 健[日本大学]
△澤村 博[日本大学]
- P-17 環境NPOの趨勢に関する調査研究
～特に活動対象としての自然環境フィールドについて～
○栗田 和弥[東京農業大学]

- P-18 野外音楽フェスティバルにおける開催地決定および継続の要因に関する研究
～フジロックフェスティバルを事例として～
○野々村 潤 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-19 わが国におけるビール用ホップ栽培地の景観構造について
○辻野 木景 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-20 東京・下町の魅力を探るマップ制作について
○菅原 雅子 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-21 徒歩および自動車での移動による都市河川沿いを事例とした景観体験の違いに関する研究
○上田 知夏 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-22 環境 NPO の趨勢に関する研究
～2008 年度における実態を設立年からみる～
○岡村 雄太 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-23 里山周辺の住民による地域環境に対する認識
○佐々木智樹 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-24 京都府南丹市美山町南地区における茅葺き民家の保存および農村景観の保全に対する住民の意向について
○森 大城 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-25 里山との関わりからみた人と自然のふれあい行動に関する研究
○古平 瑞季 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-26 文化的な景観を巡るフットパスの提案およびマップの制作について
～石川県輪島市三井町を事例として～
○中平 工 [東京農業大学]
松本 開地 [東京農業大学]
△下嶋 聖 [東京農業大学]
△上岡 洋晴 [東京農業大学]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
△麻生 恵 [東京農業大学]
- P-27 大学生に対する自然体験プログラム別にみた効果についての研究
－CASE 学生環境サミットを事例として－
○横地 佑典 [東京農業大学]
平田 太良 [東京農業大学大学院]
△栗田 和弥 [東京農業大学]
- P-28 北アルプス雲ノ平における裸地化の変遷調査
○松本 開地 [東京農業大学]
△下嶋 聖 [東京農業大学]
△麻生 恵 [東京農業大学]
- P-29 石川県輪島市三井町におけるリモートセンシングを活用したアテ林の抽出
○上原 謙 [東京農業大学]
△下嶋 聖 [東京農業大学]
△麻生 恵 [東京農業大学]
- P-30 石川県輪島市三井町における地域活性化のためのフットバスマップの作成
○山野 由里子 [東京農業大学]
△麻生 恵 [東京農業大学]
- P-31 分譲住宅団地における住民参加型による緑空間の再生ビジョンについて
○白幡 乃里子 [東京農業大学]
△麻生 恵 [東京農業大学]